

# LGBT当事者の自己形成における心理的支援に関する研究

## —ナラティブ・アプローチの視点から—

枝川 京子      辻河 昌登  
(市立加西病院)      (兵庫教育大学)

本研究は、多様で複雑であるとされているLGBT当事者にとっての人生の意味を、当事者の語りから明らかにすることを目的とした。方法としては、非構造化面接によって得られたナラティブを当事者の経験の意味づけ、語り手・聞き手の関係性という視点から、ナラティブ・アプローチの枠組みを用いた。その結果、語り手は語ることによって自分の経験に意味を与え、更なる自己理解の可能性を見出すこと、また聞き手である研究者は単一事例研究として当事者の語りを分析することによって、語り手が日々の行動をどのように秩序づけ、経験として組織化し、それを意味づけているのかを理解できることが明らかになった。また、得られたナラティブの分析から、学校教育現場におけるLGBT支援について、探索的に仮説を生成し提案した。

キーワード：LGBT, ナラティブ・アプローチ, セクシャリティ教育

---

枝川 京子：市立加西病院 〒675-2393 兵庫県加西市北条町横尾1丁目13番地

辻河 昌登：兵庫教育大学大学院・臨床・健康教育学系・准教授 〒673-1494 兵庫県加東市下久米942-1

---

# Research on the Psychological Support for LGBT Person Concerned's Self-Awareness : From the Perspectives of the Narrative Approach

Kyoko Edagawa  
(*Municipal Kasai Hospital*)

Masato Tsujikawa  
(*Hyogo University of Teacher Education*)

The purpose of this study is to clarify the meanings of life for the certain a LGBT person , considered various and complex, from the narratives of the person, by using the framework of the narrative approach.

The narratives are obtained by non-structurized interviews and analyzed from the perspectives of the meanings of her experiences and those of the relationships between the interviewer and the interviewee.

As results, the following two points are found;

- (1) The act of narratives, which made her find out the possibilities of more self-understandings, gave the interviewee the meanings of her experiences.
- (2) Researcher, as an interviewer, analyzed the narratives of the person concerned as a single case study. It enabled the researcher to understand how the interviewee orders her daily behaviors, organizes them as her experiences, and gave them the meanings.

In addition ,from the analysis of the obtained narratives, exploratorily some hypotheses about the support for the LGBT person concerned in the school education were formed and suggested.

Key Words: LGBT, Narrative approach, Sexuality education

---

Kyoko Edagawa: Municipal Kasai Hospital,1-13,Yokoo,Hojyochou,kasai-City,Hyogo 675-2393 Japan.

Masato Tsujikawa: Associate Professor, Hyogo University of Teacher Education, 942-1,Shimokume, Kato-City, Hyogo 673-1494 Japan.

---

## I. 問題と目的

教育の目的は、適切な配慮のもとに充実した学校生活を送ることを通じて、自立し社会参加するための「生きる力」を育むことにある。しかし、目に見えないマイノリティであるLGBTは社会的に不可視 (invisibility) の状態にあり、適切な配慮を享受しているとはいえない。LGBTとは、Lは「レズビアン (女性同性愛者)」、Gは「ゲイ (男性同性愛者)」、Bは「バイセクシャル (両性愛者)」、Tは「トランスジェンダー」を意味する。LGBTには、例えばゲイとトランスジェンダーが重なる場合や、性同一性障害ではなくても自分の持つ性に違和感をもつ人、自分の性や性指向を決定できない人等が該当する。そこで本論文では、性的なマイノリティを「LGBT」という括りで考えることとする。

ところで、“ゲイ・バイセクシャル男性の多くは、第二次性徴の始まりと時期を同じくして違和感や戸惑いを感じ” (日高他, 2004)、“性同一性障害者には不登校や自殺未遂を経験するものがある” (新井他, 2008)。そこで枝川 (2009) は、LGBTとその家族の語りに注目し、当事者が抱える心理的困難や葛藤を明らかにし、他者や社会との様々な影響の中で個の確立を模索していると思われる彼らの心理過程を分析・考察した。その研究においては、当事者の思いを掘り取るためにナラティブ・アプローチの枠組みが用いられた。なぜなら、その枠組みは自分の経験に意味を与え、聞き手に伝える語りの行為によって、更なる自己理解の可能性が見出せ、また聞き手は語り手との関係性や紡ぎだされるナラティブから、LGBTの経験の重さや意味の深さを考察できるからである。つまり、ナラティブ・アプローチは、個人の経験は多様であることが前提である。そして語り手が語り手の人生を再現するのではなく、彼らの語り手が人生を物語ると考える。そのためには、聞き手は当事者の身になって経験の意味を捉えるという視点が不可欠である。また、経験についての語りにも個性がある。同じ出来事を経験しても、その人の年齢・性別・居住地域・家族関係・時代背景が異なれば紡ぎだされる語りが異なるように、個人の語りはその人特有であり、その紡ぎだされた語りは語り手が生きる文化・社会を色濃く反映したものになるであろう。その自伝的な語りにも小説と同様に、強調や削除や空白や欠落や変形といった作者の意識的、あるいは無意識的な編集作用をみることができる (矢野, 2000)。語りは矛盾や亀裂をはらむものであり、同一事象の語り直しや繰り返しは当然ある。それこそが物語の生成的機能である (竹家, 2008)。つまり、自己の物語は自己によって編集されている。それは、語りによって記憶から忘却、消去された事項が再現し、それまでの編集された物語との関係を構成し直すことにつながる。自己の物語を語り直すことは、学習のひとつの形式 (矢野,

2000) であり、このような自己についての語り直しが繰り返しなされると、自覚的な生き方を生み出す可能性を示唆する。つまり、過去の出来事を変えることはできないが、過去の出来事の意味づけを問い直し、再構成することは可能である。特にLGBTの人々は、性的マイノリティであるが故に、セクシャリティに関する語りは沈黙や忘却を意識的、無意識的に強いられてきたといえる。語られたとしてもマジョリティに属する異性愛者に、そのナラティブは受け入れられているとはいえない。そしてLGBT自身が「内在化された同性愛嫌悪 (internalized homophobia)」<sup>1)</sup> の為に、自身のナラティブ生成を阻むことが考えられる。これらの知見から、LGBTの当事者が、どのような人生を送ってきたのかという実際の問題ではなく、彼らが日々の行動をどのように秩序づけ、経験として組織化し、それを意味づけながら生きているのかを訊くことは、個々の多様性を理解するという観点において意味があると考えられる。

ところで、枝川 (2009) では、LGBTの実態と彼らが望む自分のあり方についての仮説を生成し、彼らや教育現場から望まれる心理的ケアのあり方について、心理臨床学的な立場からは、今後どのような支援が可能かを個々の多様性から検討することを試みた。その結果、学校教育現場におけるLGBT支援のあり方、心理臨床家によるLGBT支援のあり方について探索的に仮説を生成した。しかし、学校教育を始め、現代社会における心理的支援の方策を見出すために、個別性の高いナラティブを全て盛り込んで論じることができず、ここに枝川 (2009) の限界があった。そこで枝川他 (2010a) では、単一事例研究としてナラティブの再分析を行った。その結果、語り手は語りによって、更なる自己理解の可能性を見出すこと、聞き手は語りの分析によって、語り手が日々の行動をどのように秩序づけ、経験として組織化し、それを意味づけているのかを理解できることを明らかにし、ナラティブ・アプローチという方法による当事者理解の意義を明確にした。さらに、枝川他 (2010b) では、ナラティブを聞き手と語り手によって共同生成されたものとして捉え、双方が相手や相手の語りをどのように解釈し、その解釈はその後共同生成する語りにどのように影響を及ぼしたのかを考察した。そして、その解釈と考察の方法は、語り手の思いを掘り取り、語り手を多面的に理解することに寄与するものであることが示唆された。

そこで本稿においても、当事者の思いを掘り取るために、単一事例を対象とし、その人の人生を深く、丁寧に解釈することで当事者の経験の意味づけをすることを目的とする。さらに得られたナラティブの分析から、学校教育現場におけるLGBT支援について、探索的に仮説を生成し提案することとした。

## II. 方法

**研究協力者：**枝川（2009）における研究協力者8名のうち、本稿ではLGBT当事者であるレズビアン女性1名（Aさん）のナラティブを選定した。なぜなら、そのナラティブの多様性と固有性を保つことで、Aさんの経験の意味づけをより包括的に分析できると考えたからである。また、枝川（2009）におけるAさんのナラティブ理解を、データの読み手との対話的省察によって再考察するためでもある。

**調査期間・場所：**X年4月下旬から9月上旬に、プライバシーの守れる公共施設の会議室で行った。

**対象ナラティブ：**本研究では枝川（2009）において得られたAさんの全4回のインタビューの逐語録を用いた。枝川（2009）における調査の方法は、以下の通りである。書面でインフォームドコンセントをとり、1回60分程度の非構造化面接を行った。聞き手と語り手の相互作用でデータが生じる為、面接回数は対象者の実情に応じて柔軟に設定した。対象者の了解を得た上で、全ての面接はICレコーダーに録音された。なお、対象者とはLGBTコミュニティグループで顔を合わせたことはあるが、個別での対話は初めてであった。

**分析方法：**ナラティブ・アプローチの枠組みを用い、シークエンス分析を行うことによって、LGBT当事者の内面に焦点を絞り、Aさんが性的アイデンティティをどのように自分の人生に位置づけてきたかを分析した。本研究でシークエンス分析を用いたのは、ナラティブの発生順や連なりなど、全体としての形をできるだけ維持しようとする目的のためでもある。この手法は、“語り手の主観的（感情的）世界やアイデンティティの研究に適し、そのような主観的世界への社会・文化的環境からの影響や「権力」の存在について明らかにすることもできる”（川野，2005）ことから本研究で採用した。具体的には竹家（2008）の分析方法に倣い、Aさんとのインタビューの逐語録からインタビューの〈ストーリー世界〉と、そこから生じたナラティブを語られた順に図式化した。続いてシークエンスの流れに沿って当事者の経験の意味づけが明確になると思われるナラティブを□として示した。また、〈物語世界〉から得られた現実の生育史を作成し、「語り」の始めに提示した。□内のAはインタビュー<sup>ii)</sup>であるAさんを、I はインタビュアー<sup>iii)</sup>である筆者を指す。このようにAさんのライフストーリーを再構成し、経験の意味づけを考察した。

## III. 結果と考察

対話は、語られた言葉をそのまま引用した。語りを編集することは語りの意味を分析者（筆者）によって改変する可能性があるためであり、またインタビューの思

いを忠実に掬い取るといった、やまだ（2007）のいう“対話的省察”のためでもある。また、インタビュアーの発言を含む自己のデータを公共化することで、データの読み手との対話的省察を図ることにもなる。さらにAさんは、明瞭に自己の考えや経験を語ってはいない。それを文字化によって明確に示そうとしたためでもある。このため、提示したナラティブは文法的に適切な表現で整理されておらず、秩序化もされていないことをお断りする。なおプライバシー保護の観点から、個人や場所が特定されるような表現は○○などを用いて改変を行った。語りの内容が分かりにくいと分析者（筆者）が判断した場合は、（ ）で補足説明を加えた。

### Aさん（レズビアン当事者女性）の人生と解釈

Aさんは20代後半のレズビアン女性である。公立中学、高校を経て、私立大学（いずれも共学）を卒業し、現在は会社員である。大学卒業直前にパートナーと出会い、現在共同生活を営んでいる。Aさんの4回の語りにおける〈物語世界〉から得られた現実の年表を、表1に示す。

表1 Aさんの語りからの「現実の年表」

#### 1. 当事者AさんによるLGBTであることの意味づけ

（0歳）関西地方に生まれる \*家族構成 母、妹（幼稚園の頃）両親が離婚。以後母と妹との生活  
（15歳～18歳）公立高校に入学  
（18歳～22歳）私立大学入学。レズビアンのコミュニティサークルに行くようになる。  
○現在のパートナーと交際を始める  
（22歳）就職。事務職から営業職に異動  
○実家を出て、生涯を共にするパートナーと同居

Aさんの物語世界は、レズビアンであることへの気づき、そして現在の生活と、将来への展望が中心である。そしてレズビアン・アイデンティティの獲得から、現代社会の問題点、改善点へとナラティブの変遷が見られる。

### レズビアンへの気づき

A：もともと、女の子を好きだなんて思ったのは、気付いた、女の子を好きだっていうのは幼稚園とか小学校ぐらいやったんですけど。幼稚園、小学校っていうのは教育自体が男は女を好きになる、女は男を好きになるって聞いてたんで、

I：幼稚園の時から？

A：からって言うより、周りから、友達から、先生とか、まあそんな感じやったんで、まあ男の子を好きになるのが当たり前みたいな感じに、思ってた。だから中学の時も女の子を好きになったんですけど、おかしいかなって思ってた。私は幼くて、小学校の時は別にそれはいいかなって。いずれ男の子を好きになるんかなって思ってた。別にあまり意識してなかったんですけど、高校ぐらいに入ってから、ほんとに女の子を好きになるっていうのは意識しだして、

その時は病気かなと思ったりもして、私の時代の時はインターネットとか携帯も持ってなくて、調べるものがなかったんで、何か、頭おかしいかなって思ってた。でも誰にも相談することもできず、カミングアウトもせずに、ずっと何か悶々と暮らしてて。大学に入ってパソコン持って、携帯も持って、そこからインターネットを介してそういう友達と出会うようになって、今に至っているんで。気付いたっていったら小学校くらいからは気づいてたんですけど、それはあやふやな感じで。で、意識したのは中学・高校くらいからです。

「あやふやな」思いは消滅することはなく、次第にその思いはレズビアンであることを確信するものになる。

#### レズビアンへの気づき:幼児期

I : やっぱ女の子を好きだなんていうのは思ったりはしたんですけど、幼稚園の時かな、幼かったんでそこまで意識とかはなかったですね。

A : それは特定の誰かを好きになる？

I : うん…誰々ちゃんが男の子と結婚したいって言うのに、私はそうじゃなくて女の子が好きだな、みたいな。

I : じゃあ、その子と結婚したいって感覚なんですか？

A : それはできればしたいんですけど、それは社会がないじゃないですか、男と女しか結婚できない、だから気の迷いかな、みたいな感じで打ち消されていったんですかね。幼稚園、小学校は。でもそれが揺るぎなくなって、中学入っても高校入ってもそうだったんで、そう考えたら、同性愛者なのかなって思ってた。確信して。

#### レズビアンへの気づき:中・高校時代

A : 中学の時は普通。女の子好きだなんていうのはあったんですけど、そこから敢えて自分が踏み出そうっていうのもなかったですし、なんかおかしいかなっていうのもあって。高校とか行ったら普通に彼氏とかできるんかなって思ったりしてました。(略)

I : その時から同性愛って(用語が)、あることは知って？

A : 知ってましたね。メディアとかでも一部あったりとか、映画とかで、高校の時に「Boys don't cry」っていうのがあって、あのドラマを映画を見て、こっそり借りてみた時に、暗い話で、何か未来ないなって思ってた。高校ぐらいいは恋愛は全くせずに、何か、どうしようみたいな感じで。生きてましたね。

#### レズビアンへの気づき:高校時代

A : おかしいなって。私はずっとおかしいって自分を否定してたんですけど。おかしいから精神科にいったら治るんじゃないかと思ったりもしてて。

I : それはずっと自分一人で抱えてたんですか？

A : そうですね。いなかったですね。高校ぐらいいまでは。

I : 家族にも？

A : 家族にも。言えるはずがないやと思ってました。

I : 言っても、まず分からない？

A : 言う勇気がないですね。そういうのって自分を認めることにもなりますし、そんなに自分を認めてなかったですからね。自己として、自分が同性愛者だということに対して、なんかその、卑下するところがあつたんで、認められないっていうのもあって。

I : 認められないって自分が思っているから言えない？

A : そうですね。うん。

#### コミュニティへ:大学時代

A : 男の子を多分、好きにもならないだろうなっていうのもあって、だから大学、インターネットとかもなかったんで、大学になったらそこからネットを通じて誰かと知り合っていきたいなっていうのはあって、まあ東京とかの〇〇とかがあつたりしてたんで、そういうところに行けば、誰か出会うのかなって思ってたんで。大人になってお金を貯めたら、そういうところに行ってみようって思ったりはしてました。

I : そこから自分の仲間が増えて。

A : はい。仲間が増えたことが大きな要因ですね。

I : それは今の自分と、つながってますか？

A : それがなかったら、いずれはあつたと思うんですけど、今の自分はないでしょうし。でもいずれ大学出て、社会人になったらそういう所に行くだろうっていうのは思ってたんで。

I : 大学のお友達と、コミュニティの友達とは？違います？

A : そうですね。大学の友達には、大学の時はなかなか言えなかったんですけど。言えなくて、大学の友達とLGBT、レズビアンとの友達と分けて生活はしました。大学の友達は言えないっていうのもあつたんで。

Aさんは同性が恋愛対象であるという自身の性指向に気づいた時、「自分はおかしいのでは」「高校に行ったら普通に彼氏とかできるだろう」「精神科に行ったら治るのでは」と様々な迷いを抱えながら、それを自分の中に閉じ込める。思春期は第二性徴を迎え、心も体も急速に変化しそのバランスが乱れる。Aさんも自らの性指向を含む自分の性をどのように受け入れるのかを自分自身に問われ、さらに恋愛対象である同性へのまなざしと対応に戸惑いがあつたと思われる。Aさんがその課題を一人で乗り越えていくことには、異性愛者のそれよりは高いハードルであつたと考えられるが、Aさんの語りはそこに言及されることはない。Blos (1962) の思春期論によると、大学生の時期に相当する思春期後期 (late adolescence) では、自分とは何者かという問いに対する一応の形がほぼ形づくられる。この時期の課題は統一した

自我を仕上げることにあり、自我はその働きの中で労働、愛、社会的連帯を引き出すような安定した表現を融合させることであるという。高校生の時にAさんは「大学生になったら（レズビアンである）誰かと知り合っていたい」「東京に行けば誰かと出会うのかな」「いずれ行くだろう」と、同性愛者である自身を肯定し、同じ性指向をもつ仲間は見つけられない現実を受け入れている。自己肯定感が得られない中でAさんは、内なる自己と対面し、自己の内省や洞察を深める作業を経て、レズビアンである自分自身を認めるに至ったことが、その語りから窺える。それが、近い将来レズビアンコミュニティに行くという決意と準備に繋がったといえよう。

また、服部（2000）は、思春期に「自己中心性 対 孤独感」という課題があるという。この時期、自分のことを何よりも思い、自己の意識や自己の感覚が重く、常に自己が念頭にある。服部はこれを思春期の健康な自己中心性であるとした。一方でマイナス面である孤独感は、自己に深く目を向けるあまり、自己の内界が相対的にふくれあがり、世界から絶縁していく感覚として経験される危険性があり、親など親しい人々との別離の中で激しい孤独感におそわれることもあるという。Aさんは「未来がなく」「同性愛者である自己を卑下」し、性指向について周囲の誰にも明らかにできない孤独感を抱える。しかし、高校卒業後は自身の行動半径を広げ、仲間を見つけようという近未来の夢を描く。その計画は、当時のAさんの人生の活力となったのであろう。つまりAさんは、その孤独感を凌ぐ自己中心性を培い、その葛藤を乗り越えたともいえる。そして夢を実行したことで、Aさんは自我の統一を促進した。「それがなかったら今の自分はない」という語りからも、コミュニティに所属する自分を得たことがAさんの集団への帰属意識をもたらし、社会的欲求を満たすことができたのであろう。さらにそれは、Aさんの心理的な成長を促し、自分とは何かという問いの肯定的解決にも向かわせたと考えられる。この課題に直面する発達段階にコミュニティに参加したことで、これまで流動性の高かった自我状態が確立・安定へと向かうことができたのであろう。そうしてでき上がったアイデンティティを元にAさんは就職し、同性パートナーと生涯を見据えた交際を構築するようになったと考えられる。

さらにAさんの性指向は揺るぎないものになっていくことが、その後の語りから窺える。確立させたその性アイデンティティは、性アイデンティティに留まらず、社会進出する女性の生き方を考えるものへと変容していく。Aさんは、定年まで勤務する決意を持って就労している。また、パートナーとの結婚・出産、さらに住宅の購入が彼女の人生計画にある。そのパートナーが同性であるが故に、雇用における男女の格差や社会的な保障が享受で

きないことを、Aさんは実感することとなる。Aさんは女性は事務、男性は営業という性役割からの職務分掌に納得できず、与えられた事務の仕事では「面白みや深みがない」ことから営業職への異動を希望し、それを達成する。それは業務内容による勤労への充実感を得るためでも、男女の賃金格差を少しでも埋めるためでも、長く勤めるための方策でもある。またレズビアンであるAさんには「結婚して夫に稼いでもらう」という選択肢はなく、「結婚しない女性として定年まで働く」ために自分の持つ環境の中で、どのように自己を構築していけばいいのかを模索し、職業アイデンティティを獲得していったと考えられる。しかし、希望の業務に就いたからといって長期的な見通しでの自身の「立ち位置」は不明である。周囲の状況を判断し、いかに自分としての有り様を反映させていくかが今後のAさんの課題であり、それが新たなアイデンティティの探索を促進するのであろう。

またAさんはパートナーとの共同生活から、同性愛者への法的な整備の必要性を認識している。Aさんとパートナーの双方が働くことによって現在の生活が維持できるのであり、一方の収入だけでは経済的な問題が発生する。それだけでなく法的な家族でないことは、保険や年金の支払い義務が双方に生じ、それは、一方の収入では払えないものであることをパートナーの失業経験から実感している。そしてその経験は、「1人で生きていくだけの仕事がないと、レズビアンの場合は生き辛いなっていうのはありますね。パートナーがいてもどうなるかわからないんで」というナラティブを生み出す。パートナーが存在しながらも、一人で生きる自分を考えなければいけない現状をもとに、Aさんは、レズビアンだけでなく、異性愛者の女性に対しても、一人で生きる覚悟は必要だというナラティブをへと発展する。同性パートナーは法的な婚姻関係にないため、結婚している男女の夫婦に認められているような、相続権、社会保障、税制上の優遇など法的な保障を受けることができない。それが自分の生き方について不安を持つだけでなく、「女性としてどのように生きていくかを考えるべき」という他者女性へのメッセージの生成となる。つまり、自分の性をどう生きるかということは、個人の生き方の問題でありながら、社会的な側面をもっているといえると思われる。そのようなAさんの語りに追従しながら、インタビュアーは次のようにAさんに問いかける。

#### 自分らしく生きる

- |   |  |
|---|--|
| I | ：なんかつごく先のことも前向きに考えておられるなあって私は思うんですけど。          |
| A | ：はあそうですね。                                      |
| I | ：うん。それを結構誰にも頼らずに確立させてきたような感覚を私は持つてるんですけど。その辺って |

どう思われます？

A：それはやっぱ、そのなんかレズビアンと生きてきたからには、それは自分の使命として生きていかなければいけないのかなって。やっぱその、なんですかね。結婚とかもできない、旦那さんとかそういう人の扶養になる事もできないんで、最悪自分が一人でもちゃんと生きていけるようには、収入面とかっていうのをきちんとしていかなきゃいけないなっていうのを、思ってるんで。仕事とかは辞めない。働いて、地道に働くっていうのが一番大事なんかなってっていうのは思いますね。それは、その、まあ当事者の人やったらみんなそう思うんじゃないですかね。レズビアンの人やったら結局は誰にも頼っていく事ができないんで。

I：でも色々な人がいらっしやる中で、まだそこまできれないって人もいらっしやいますよね。

A：そういう人はまだ自分の中の自己形成っていうのができていないのかなってっていうのは。でもいずれ直面しなきゃいけない問題やとは思って、っていうのは思います。

I：そうである自分っていうのはどんな感覚ですか？

A：感覚…え…当たり前なので…そうしないとイケない…MUSTです。

I：MUSTで、こういう自分になってきた…

A：そうですね。そうしないと、誰も助けてくれないです。

A：…やっぱ気付くのは小学校。中学校、高校と好きになるのはなんで男の人好きにならないんだろうとかっていうのは思いましたし、自分がおかしいかなってっていうのも思って、で、自分の事好きじゃなかったんですけど、やっぱそれはコミュニティ出たりして、色々な人と知り合うことによって、まあ別にレズビアンでもいいかなってっていうのは、思いました。

I：じゃあ今は自分が好きですか？

A：まあそうですね。別に今の生活にも特に、困ってる事もないんで、このまんまできたらいいかなってっていうのは思います。

Aさんは、社会状況においても法的な面においても困難を感じながら発達の視点を持ち、自分らしく生きる方策を模索してきた。その語りからは、職業的アイデンティティ、性的アイデンティティ、文化的アイデンティティ等のアイデンティティ概念は単体ではなく、また個々の内面だけのものでもないことが分かる。これらのアイデンティティは過去の自分と現在の自分、そして未来の自己との連続性によって生成されるものである。語りを読み解くインタビュアーは、その時に語り手が関与した社会との関係も視野に入れ、語りを構築する必要がある。

さらにAさんは今後の教育の在り方について、考えを発展させている。

### LGBT が生きやすい社会のためには、やはり教育

I：…で、それは、話す人とかあったらよかったなって今、振り返って思われることってありますか？

A：あ、思いますね。学校の人権の授業と、体育の保健の授業とかで、その好きなのは男と女の人の方が当たり前で思春期になったら、異性の人を好きになる人がいるっていうじゃないですか。確かそう言われたんですよ。そうじゃなくって、まあ少数でもあるけれど、1%とかそういう確率であるけれど、その、同じ人を好きになる人がいるっていう事だけでも、言うだけでも、うん、そういう意味ではちょっとは楽になったのかなってっていうのは、思いますね。

I：言われるのは、自分に？周りに？

A：自分にもですけどね、それは。中学とか高校、高校くらいまではやっぱおかしいのかなって思ったりもしてたんで、

I：じゃあおかしいのかなってっていう思いが改善されるかもしれない？

A：うん…そうですね、というか私のときはインターネットもそんなに普及してなかったんで、その情報とかネットとかで検索、今やったらすぐできるんで、今やったら中学生でもやるかもしれないですけど、でも、家とかやったら履歴が残るじゃないですか。で、学校とかでも履歴が残るから、高校までそういう自分の、なんかもてないんじゃないかなって思ったり…しますね。

I：じゃあそういう風な話が、ちょっとでもあったら…

A：あればいいなあと思いますね。はい。

しかし、教師やスクールカウンセラーによる直接的な支援は必要ないとも語っている。それは「言う事によって自分を認める、もしくはカミングアウトをする」ことになるからだという。そして、「小学生や中学生はそこまで自我がはっきりしてる子っていない」と語る。だからこそ心理教育の機会を設け、「マイノリティの授業の際に、教師が同性愛者や性同一性障害の存在、そしてその実数などの現状、メディアの中だけではなく、実際にいるということ、同性を好きになる事はおかしくないんだと言って欲しい」という思いがある。

また、同じセクシャル・マイノリティでありながら、性同一性障害は見える問題であって、同性愛者は見えない問題だとも語っている。Aさんは、「性同一性障害の場合は自分を異性愛者の世界に入れ込もうとして、同性愛者の場合は異性愛者の世界から外れようとしている。入ったとしても、入れない」「性同一性障害の場合は男が女に変わって、付き合う人も男と女、戸籍を変えることもできる。日本の法律でもちゃんと認められている。逆に同性愛者の場合はそんな認めてないとかやっぱ見えないし、政治で話題にならないし、法律にもならないし。そういうと見える存在は何かいいなあと」と語った。LGBTでありながら、法整備が見直されつつあり、社会的認知が広まりつつある性同一性障害の人との立場

の違いを認識することによって、「レズビアン・アイデンティティ」は確固としたものになり、それが更に社会の変革を思う気持ちが増すことに繋がるのだと思われる。

## 2. 語ることによるAさんの気づきと変化

Aさんはレズビアン・アイデンティティを確立させ、パートナーと生涯を共にする決意は揺るぎない。そのため、これまでの人生を否定的に評価したり、学生時代の混乱について詳細に語ることはなかった。語るという行為については、次のような感想を持っている。

### 語ることについて

A：そうですね…う～ん。なんやろう。何かやっぱその…まあ自分でもこれは普通だと思ってるんですけど、もしかしたら普通の、ノーマルな普通の異性愛者の人からみたら、もしかしたらちょっと違う生き方、かと思うんで、そういう面とかどうなのかなと思ったりとか、あと、自分のことをうまく話せれないんで、うん…でも、自分の事を色々聞かれることによって、ちょっとまあ自分の生き方とかも考えるように…。なったりとかしました。

A：聞かれて、ちょっと自分の中で考えて、返答する。あまりそんな、1対1で色々質問される事もなかったんで。

I：そうですね。それもとても個人的なことを、それもセクシャリティも含んで聞かっていうことはかなり稀だと思うんで。

A：そうですね。そういう意味では自分の事も振り返りたい機会かなっていうのは、ああ、思いますね。

I：じゃあそれによって自分の未来もちょっとずつ固まった感じですか？

A：未来、そうですね。

I：結構、未来の語り

A：ああそうですね。

I：3回目くらい多かったんですよ。

A：ああそうですね。

I：将来ってというのがね。

A：はいはい。

I：あまり過去を振り返ってこうやったっていうよりも、私は先を見ているんだなっていう感覚を持ったので。

A：ああそうですね。そういう面ではそういう風に生きていきたいと思ってますよね。

I：ああ。それは話すことではっきりしてきた？

A：そうですね。

語るという行為は過去の自分を再構成するだけでなく、未来への展望へとつながっていく。Aさんは現在の自分に充足感や満足感を得て、肯定的な認知を行っている。そのため過去を否定的に認知することも、未来に過度に悲観的になることもないのであろう。その根底には、自

分の人生の生き方をインタビューの場で積極的に解釈する志向が存在したと考えられる。つまりその解釈は、これまでの人生を一つの達成と捉え、自分の人生を納得できたことによる。現在の自己・過去の自己が整理された時、これからどうしたいのかという未来志向のナラティブが生み出される。Aさんは、自己の語りなおしによって、これまでの自分の人生の道筋の整理をつけ、自己を再構築させているといえる。それは自己統合への導きであり、これまでだけでなく、これからのライフサイクルの中での自己を確認していく力となり得ると思われる。

## 3. 学校教育におけるセクシャリティ教育の推進

自己の内面を言葉として表出することは、自分の思いの気づきを生み出す。目の前の相手だけでなく、自分自身にも語るという行為は、自己という確かなまとまりを再認識し、新たな自己を形づくる契機となり得る。矢野(2000)は、自己が自己というまとまり(自己の同一性)を保つためには、そのプロセスをまとめる枠組み、あるいは構造が必要になり、そのような構造はなにより言葉によって象られているという。今回のインタビューであるAさんは、自分のセクシャリティを含む自分の人生を肯定的に意味づけている。それはこれまでの経験から自身の枠組みを形成し、重ねた経験によって枠組みを変化させながら、自己を形成し自身の人生を歩んできたことを意味する。また、自分のセクシャリティについて語ったことは、「性自認が明確になった自分」という確固とした枠組みがあることを示す。それは語りの構築によって、LGBTである自分自身に対して積極的な意味を見出すことになる。このようにインタビューの場において、インタビュアーが今、目の前のインタビューが持つ枠組みを理解し、その枠組みがどのような自己を作り出しているのか、加えて心理状態や人格形成上の発達プロセスを知ろうとすることは、得られたナラティブの多面的な解釈に繋がる。

また、性についての語りは自身の身体、意識等、様々な関連の中で生成される。さらに個人の内面だけのものではなく、その人が生活する文化、社会に深く関わっている。目の前のインタビューは、性アイデンティティ単体だけでなく、職業的、文化的、社会的アイデンティティ等、性アイデンティティに付随した様々なアイデンティティを加味し、語りを生成している。さらに過去の自分と現在の自分、そして未来の自己との連続性によって生成される語りは、時系列に語られるものではない。インタビューが現在の自身のあり方についての語りを紡ぎ出すことで、過去を振り返り、未来を展望する語りが生じるのである。つまり、インタビュアーは当事者の様々な有り様を尊重する姿勢と、多様な視点をもって語りを読み解く姿勢が求められる。

また、多くのLGBT当事者が自分の性指向を意識する学齢期は、思春期性と相乗し、当事者は不安や混乱を覚えやすい。しかし当事者の児童・生徒は自身の性について、積極的に知り、それを語る機会を持つことは殆どない。その状況は、学校や仲間への所属感をもちにくいことに繋がりがねず、「原因不明の」不登校状態に陥る当事者もいる。しかし、当事者は教師やスクールカウンセラーなど、学校に存在する大人に直接的な支援を求めていることがAさんの語りから分かる。

個々の児童・生徒を理解する際に、教師を始めとする専門家は、本人の性格や気質、家庭環境、対人関係など多角的に当人を理解する。そこに多様な性に対する知識を持ち得ていると、理解や見立てがより多面的に行われることになる。日高他(2004)によると、ゲイ当事者が性指向等の言葉の意味を知るのは平均13.7歳、自分の性指向をはっきり自覚するのは平均16.4歳である。この時期に正確な知識や情報を与える機会が得られると、当事者の心理的負担が軽減すると考えられる。つまり個別の支援の前段階として専門家が取り組めることは、多様な性に対する正確な知識をもつことである。その上で得た知識を、学校教育の端々に盛り込み、当事者だけでなく非当事者にも伝えていくことだと思われる。人権教育はもとより、保健体育における性教育の単元、家庭科における家族の単元など、多様な性の知識の伝搬は、柔軟な視点をもつことで様々な教科に盛り込むことは可能であると思われる。そのような環境整備は、当事者のアイデンティティ構築における自己形成を支えるものとなる。そして更に当事者の支援のみならず、非当事者や保護者に対しても、LGBT存在の可視化に繋がるであろう。個別のケースに対応するだけでは大きな変化は生じにくい。LGBTの現状や正しい性の知識を伝搬していくことで、LGBT当事者の支援だけではなく、全ての児童・生徒の教育にもなり得る。さらにそれは性の学習だけでなく、「人間の多様性」の学習といえるであろう。多様な個性をもった児童・生徒が集まる学校は、その多様性を伝えるのに最も適した場所であるといえよう。

また、教師、スクールカウンセラーなど、専門家自身が多様な性の学習の機会を得ていないことも考えられる。そのためにも、行政機関が、教師に対して正しい情報の普及の機会を設けることも必要である。さらに教員養成大学のカリキュラムに、多様な性の理解に関する講義があると、正確な情報を持った専門家が教育の現場に立つことになる。近年、学校教育現場では、性同一性障害者に対する、理解や支援が検討されつつある。しかしそれは、LGBTを更に不可視化に陥らせる危険性も孕む。性は男女に二分化させるものではなく、多様なものであるという理解のもとでの教育的支援が求められる。つまり、LGBT支援は個人のエンパワートメントを目指し、

個人を環境に合うように支えるだけではなく、環境を個人に合うように変えるという個人と環境の適合性という考え方も必要である。

さらに、特定の個人だけに特異な事例研究をしたとしても、得られた知見から何らかの意味で「一般化」できる「代表性」「典型性」を備えている必要がある(やまだ, 2006)。「多様性」「プロセス」を重視する質的研究は、「一致率」「同一性」「不変性」「一貫性」という信頼性の基準では調べることはできない。自己のデータを公共化して、時間をおいて繰り返しマイクロアナリシスすることで省察的に再現できる(やまだ, 2007)のであり、今後の課題としては、枝川(2009)におけるナラティブ・データの公共化を行い、長期的な視点をもって、個性記述的研究に終わらない研究を目指すことで、最終的には一般化を可能にできると思われる。

セクシャル・マイノリティの立場におかれたLGBTの人の存在は、性の多様性から始まる人間の多様性、価値観の多様性を自他ともに認めることの必要性、さらに自分らしく生きるための指針を与えている。本研究がマイノリティの立場にある人の心理的支援の方策の一つの指針となるよう、筆者は対話的省察による研究結果の一般化を目指し、微力ながら研究を続けていきたい。

## 注

- i) ホモフォビアは、同性愛者を合理的な根拠なしに否定的に捉える心性を指す。同性愛者が周囲の同性愛に対する否定的な態度を取り込んだものを「内在化された同性愛嫌悪 (internalized homophobia)」という。
- ii) 本研究では語り手を「インタビューー」、聞き手を「インタビュアー」と表記した。ナラティブ研究では研究者と研究対象者との関係が従来の心理学モデルとは異なる。いつ、どこで、誰が聞いても同じ「情報」が得られるという観点で捉えず、語りの成立はインタビュアーとインタビューーの相互作用によるというやまだ(2007)の見解に倣ったためである。

## 引用文献

- 新井富士美・中塚 幹也・佐々木 愛子・安達 美和・平松 祐司 (2008). 性同一性障害患者の思春期危機について思春期。一般演題 第60回日本産科婦人科学会学術講演会。
- 枝川京子 (2009). LGBTの当事者と家族の自己形成における心理的支援に関する研究——ナラティブ・アプローチの視点から——兵庫教育大学大学院学校教育研究科修士論文(未公開)。
- 枝川京子・辻河昌登 (2010a). あるLGBT青年の語りからみるナラティブ・アプローチの意義 発達心理臨床研究 16, 117-127.
- 枝川京子・辻河昌登 (2010b). LGBT当事者の理解にナラティブ生成が果たす役割 心理臨床学研究 (投稿中)



- 服部祥子 (2000). 生涯発達人間論 人間への深い理解と愛情を育むために 医学書院.
- 日高康晴・市川誠一・木原正博 (2004). ゲイ・バイセクシャル男性の HIV 感染リスク行動と精神的健康およびライフイベントに関する研究 日本エイズ学会誌, 6, 165-173.
- 川野健治 (2005). 質的データの分析技法 動きながら識る, 関わりながら考える 心理学における質的研究の実践 伊藤哲司・能智正博・田中京子 (編) ナカニシヤ出版 pp119-140.
- Blos, P. (1962). *On adolescence: A psychoanalytic interpretation*. New York: Free Press. (ブロス, P. 野沢栄司 (訳) (1971) 青年期の精神医学 誠信書房)
- 竹家一美 (2008). ある不妊女性のライフストーリーとその解釈——「不妊」という“十字架”を背負って 京都大学大学院教育学研究科紀要 54, 152-165.
- やまだようこ編 (2007). 質的心理学の方法——語りを聞く—— 新曜社.
- やまだようこ (2006). 質的心理学とナラティブ研究の基礎概念——ナラティブ・ターンと物語的自己—— 心理学評論 49 (3), 436-463.
- 矢野智司 (2000). 生成する自己はどのように物語るのか やまだようこ (編) 人生を物語る—生成のライフストーリー— ミネルヴァ書房.

(2010. 9. 1 受稿, 2010. 12. 16 受理)